

第八号

はまのうと桜貝と海光

少加故里

鵲沼



会了語と沼鵲

昭和五十四年十月十三日発行

私はたいてい長靴をはいた生活をしているがこれが私のトレードマークと
なってしまったようである。原稿など書き疲れて畠え行くが、畠はいつも
泥だらけだし、小川が真中にあり、その水たまりを越えるのに
はどうしても長靴でないと都合が悪い。

私と長靴との生活は長いし、しかも強烈な思い出ばかりが残っている。
私が通っていた頃、藤澤小学校の校庭は現在よりずっと広く雨が
降ると一ぱいに水がたまった。長靴などもぐつてしまうほど水がた
まったがそれが嬉しくて長靴をびしゃびしゃにして遊んだ。

小学二年生の或る雨の日、校庭で遊んでいると、誰からともなく藤
沢駅のふみ切で友達がひかれたとの報告が入った。私は長
靴を抱えて走った。ひかれたのは私の同級生であり、ひいた列車に
担任の先生が乗っていた。雨傘と、小さな長靴が散っていた。私は大声
を上げて泣いた。十九歳だった若く美しい先生はそれから憂愁

のかげりを秘め笑わなくなった。私はそれから鉄棒から落ち

骨折からロクマクを併発して、二学期間学校を休んだ。三年生

になると早々、名古屋に転校し、藤沢ではとうとう長靴をはく機会

はなかった。しかし、そのまま藤沢小学校にいたとしても二度と長靴を

はかなかったかもしれない。

先生とはお別れの時二人だけの写真を撮ったが私が去ってしばらくしてやめられたと言う。もう四十年前の出来事となった。

中学三年の時、湘南中学から秋田縣の湯沢中学に転校したが、湘南の暖かい気候にくらべ、汽車がとまるほどの豪雪地帯であった。

長靴は必需品であったがそのころは長靴などは売っていなかった。あったとしても農家が米を出し、それも一足、二斗とか三斗とかの高値でとうてい私などはけるものではなかった。

私は祖父から習ったワラジをあみ、それをはいて往復十六粒の雪

道を学校へ通った。骨身にしみ通る冷たさであった。これが私

の味わった初めての青春の味とゆうものであった。この冷たさは今も忘れない。次の年の冬、友人がみかねて古い長靴をくれた。

つぎはぎだらけの底がすり減ってとうていはける代物ではなかったが私には有難かった。長靴は小さくきゆうくつで足が痛かったが暖かった。この暖かさは友情とゆう私が青春で味わった次の味であった。この暖かさは今も忘れない。

しかし、この長靴は大変危険であった。底がすり減ってよくすべる。それに雪道は馬の背と言ってソリなどが通ると真中だけが高くなりかちかちに凍りしかもするどくとがって氷壁のようになる。疎開したてゝなれない私はよくすべって転んだ。それも両足が宙に浮き脳天をしたたかに打つのである。七転び八起きどころではない。

私は「師よ師よ私は何度立ち上がらなければならぬのですか。」「汝は七の七十度倒れても立ち上がらなければならぬ。」との武者

小路実篤の詩をくり返しては這うようにして歩いた。富士先生と武者小路の旧宅を散策した時、この詩が私の脳裏をよぎった。

叔父が何十年か前に中学に通っていた時着たマントを祖母がくれた。古くて触ると切れ転ぶと破れた。長靴もよく切れ破れた。さわると斬れる。私のアダ名は相州から来た「正宗」であった。

この長靴とマントは私の足と腰とを鍛えてくれた。私が動きが敏捷となりスキーが上達し、やがてすぐスキーの選手になれたのもこの長靴とマントのおかげであった。いかに転ばないで、マントを破らないで学校に行けるか、これが私の青春の冬の日々の重大な課題でもあった。この厳しい雪の試練は、私の「正宗」を益々鍛えてくれた。私が三十代後半から小・中学生とサッカーをやり、マラソンをやり、こゝ十年間続けてこれたのもこの長靴とともに、

風雪に耐えた青春の幾年かゝあったからである。

私は高校二年の秋腎臓結核で倒れ、薄暗い病院のベッドの上で三年間の入院生活となり、もう二度と雪道を長靴で歩くことはなかった。

その長靴は病床の片隅で再起の私を待ってくれたが、私は昭和二十七年秋、湯沢をたった一人で去った時、それを秋田、山形の縣境で汽車の窓から捨てた。まさに弊履の如くであった。それはトンネルの中であった。私は生きるために東京へ出て来た。(つづく)

(鵜沼を語る会リーダー)

鵜沼の野草（その一）

堀川デルタ地帯

伊藤節堂

昭和三十九年オリンピックのとき、上流を埋め立てられた堀川は、いま鵜沼海岸二丁目の雅叙園西側から国道一三四号線にかけられた渚橋の下を流れ、さらにサイクリング道路と公園（湘南海岸公園いこいの広場）にかかる片帆橋の下を流れて引地川にそそぐのである。

堀川といえば聞こえはよいが見た感じでは単なる下水溝に過ぎない。ゆくゆくは暗渠が設けられて、一番に埋め立てられるのではないだろうか。

さてここでデルタ地帯と呼んだのは、堀川の下流、サイクリング道路と公園と引地川との間が三角形をなしデルタに相当するからである。おそらく堀川の出水や引地川の氾濫では、いつも水に浸った場所に違いない。そう思っただけで見ていたところ、これが意外に早く証明された。

昭和五十四年十月十九日の台風二十号では集中豪雨で増水したところへ、台風の高波と満潮とが重なって引地川は満水し、サイクリング道路の上にも波がかぶった。このため堀川デルタは一面に厚い砂とごみにおおわれ、丈の高い植物の穂先が、かるうじて砂の上に見えるだけである。この地帯の植物が元にもどるのはむずかしいと

おもふ。

ところで堀川デルタの植物は、かつて砂丘であつたときの海浜植物と、上流から運ばれた平地植物とが混在しており、種類が実に豊富なのである。中でも鶺鴒沼砂丘ではすでに絶滅したハマエンドウがここでは群生していたり、ヘラオオバコやカモノハシなど他に見られないものがここにはある。

堀川デルタの植物が再び芽吹くことを願うものであるが、とりあえず本年五月以降、折りにふれて調査した植物をここに記録し後日の資料としたい。

-
- | | |
|------------------|-----------|
| 一、セイヨウタンポポ | (キク科) |
| 二、ノゲシ | (") |
| 三、ハルジオン | (") |
| 四、ヨモギ | (") |
| 五、ヒメムカシヨモギ | (") |
| 六、オオアレチノギク | (") |
| 七、ブタクサ | (") |
| 八、クワモドキ | (") |
| 九、オナモミ | (") |
| 一〇、フタバムグラ | (アカネ科) |
| 一一、ヘクソカズラ | (") |
| 一二、ヘラオオバコ | (オオバコ科) |
| 一三、オオイヌノフグリ | (ゴマノハグサ科) |
| 一四、ヨウシュチヨウセンアサガオ | (ナス科) |
| 一五、ハマヒルガオ | (ヒルガオ科) |

- 一六、コマツヨイグサ (アカバナ科)
- 一七、マツヨイグサ (")
- 一八、メマツヨイグサ (")
- 一九、カタバミ (カタバミ科)
- 二〇、ムラサキカタバミ (")
- 二一、ハマエンドウ (マメ科)
- 二二、カラスノエンドウ (")
- 二三、メドハギ (マメ科)
- 二四、テリハノイバラ (バラ科)
- 二五、キツネノボタン (キンポウゲ科)
- 二六、マンテマ (ナデシコ科)
- 二七、イノコズチ (ヒユ科)
- 二八、ギシギシ (タデ科)
- 二九、スイバ (")
- 三〇、ママコノシリヌグイ (")

-
- 三一、ドクダミ (ドクダミ科)
 - 三二、コウボウムギ (カヤツリグサ科)
 - 三三、コウボウシバ (")
 - 三四、アゼガヤツリ (")
 - 三五、ヨシ (イネ科)
 - 三六、ススキ (")
 - 三七、カモノハシ (")
 - 三八、オヒシバ (")
 - 三九、メヒシバ (")
 - 四〇、エノコログサ (")

(五四、一一、三記・鵜沼松が岡)

鵜沼の野草（その二）

海岸砂丘（引地川 辻堂境）

「私は早朝の湘南砂丘を散歩する。朝日がのぼると逆光に浮き出す風紋が実に美しい。」

その美しい風紋と対照的に、一方には雑草の群生がある。雑草というのは耕作物に対する害草を意味するが、ここではすべての雑草が防砂の役割を果たしているのだから害草とはいわれない。

さて一口に雑草と言われるこれらの砂丘植物にもそれぞれに名前がある。全国どこにも見られるのがハマヒルガオで、葉は腎臓形、初夏アサガオに似た淡紅色の花を開く。

少しはなれてコウボウムギの群生がある。

別の名をフデグサといい、地下茎に筆状の部分がある。春にオオムギに似た一五cmほどの花穂が出るので、筆・弘法・麦と連想してこの名がついた。

筆草の根をばたばねて砂の上に

歌書きて見つ磯のタぐれ

落合直文

砂防のすのこの根方にハマニンニクの群生がある。葉形がニンニクに似ているのでこの名がついた。別名をクサドウ、またはテンキグサともいう。テンキはアイヌ語で籠をいうそうだ。郷里新潟県北部の海岸ではタンコチといい、岩ノリを干すときのすのこを編む。延喜式に諸国進^{クテマンル}年料雑薬の項があつて、相模の国から貢進される薬草の中にハマボウフウ

のことが載っているという。探しているがいまだに見つからない。若葉は香気があり食用に、根はせんじて感冒薬に用いるとある。

鵜沼海岸から茅ヶ崎の海岸まで砂丘の上を自転車歩行者専用道路が通っていて、そこが私の散歩道のだが驚くことはあのがん丈なアスファルトを押し上げ、押し破ってコウボウシバやカヤツリグサ、それに葉の軟らかいハマヒルガオまでが新しい芽をのばしていることだ。スプーンを曲げるオカルトなどは及びもつかない不思議さがある。

ある場所ではハマヒルガオの群生の上に、寄生植物が黄色く覆いかぶさり、まるでライメンをぶちまけたようになっていた。これが九月付け本紙に報道されたアメリカナシカズラで、

これこそ砂丘植物にとって憎むべき害草なのだ。」以上は昭和五十三年九月二十二日付神奈川新聞「私の意見」欄に筆者が投稿したものの一部である。

さてこの美しい砂丘も、去る十月十九日の台風二十号で見ても無ざんに荒らされてしまった。高波はサイクリング道路をこえて打ち上げ海側の砂丘は削り取られ、新しいすのこは殆ど打ち倒されてしまった。

只今はサイクリング道路に沿って辻堂境まで新しい防砂網みを張る工事がなされているが、これが完成すると、砂丘植物はちょうど困いの中に保護される形となる。しかし私たちが観察、調査することはできなくなるかも知れない。

(五四、一一、一九記)

(調査五四年五月から九月)

- 一、セイヨウタンポポ (キク科)
- 二、ノコンギク (")
- 三、ノゲシ (")
- 四、ヨモギ (")
- 五、オナモミ (")
- 六、フタバムグラ (アカネ科)
- 七、ヘクソカズラ (")
- 八、ハマヒロガオ (ヒルガオ科)
- 九、ネナシカズラ (")
- 一〇、コマツヨイグサ (アカバナ科)
- 一一、メマツヨイグサ (")
- 一二、オオマツヨイケサ (")
- 一三、カタバミ (カタバミ科)
- 一四、ハマエンドウ (マメ科)

- 一五、カラスノエンドウ (マメ科)
- 一六、メドハギ (")
- 一七、マンテマ (ナデシコ科)
- 一八、シロザ (アカザ科)
- 一九、オカヒジキ (")
- 二〇、ギシギシ (タデ科)
- 二一、ユツカ (和名イトラン) (ユリ科)
- 二二、コウボウムギ (カヤツリグサ科)
- 二三、コウボウシバ (")
- 二四、アゼガヤツリ (")
- 二五、ススキ (イネ科)
- 二六、オヒシバ (")
- 二七、メヒシバ (")
- 二八、スギナ (トグサ科)
- 二九、ハマニンニク (植栽したもの)

(以上)

大震災前後からの鵜沼海岸（一）

高木和男

私が鵜沼海岸の地に初めて来たのは大正七年（一九一八）の夏で、それまで、毎夏葉山の漁師の部屋を借りて、夏を過ごしていたのを大正六年十月の大暴風で漁師の家が荒らされて行けなくなつたので、鵜沼海岸の家を買うことにしたようだ。

どんないきさつで鵜沼を探したか全然不明である。

この家は草葺き母屋に、新しい離れが建っている家で、地所は長細いもので、後に空地があつた。南側に窓がなく、家としては余りよい家ではなかつた。こゝに少なくとも二年は来ていたと思う。場所は今の沢肉店とスズキヤの間を入つたところの道路の西側で、熊沢屋から通じる道路の突き当たりになるところである。（現松が岡四ノ一六ノ一六あたり）

家の南側にも、草葺きの貸家があり、北側と西側は山中別荘の広大な所有地で、何処に家があるかわからないような、

松山であった。

家の前は、芋畑で、其の向側には草葺きの家があった。その芋畑の北側に道路があつて、この道路は、今の熊沢屋のところを経て、大曲りに通じていた。この熊沢屋のところには巡査の駐在所があつた。

この道路の北側も芋畑で、今の天理教のところには、ドイツ人が住んでいた。岸田劉生の鵜沼日記に出てくるステンベルヒである。

私の家の前の道路を北に行けば、道路は今でも残っているように、Z字に曲っている。曲つて、北に行つた一つ目の左に折れる道路をつき当りまで行くと西村別荘で、この道路の曲り角の北側に岸田劉生が住んでいたという。

この辺りは貸別荘が多かつた。門や柱を赤く塗つた家が道路の右側（北に向かつて）に並んでいたように記憶する。これが林別荘といつたものではないかと思う。

当時、鵜沼海岸へ来るには、藤沢駅まで汽車で来て、藤沢駅の南口に降りて、江の電に乗つて来たのである。藤沢駅は当時から、

跨線橋があったように記憶する。江ノ電口にも改札口があった。

電車は単線であることは今も変わらないが停留所は違っている。藤沢の次ぎが石上、次ぎが川袋、藤が谷、鵜沼の順である。川袋は堤防の上にあるような駅で、この近くで、片瀬街道から鵜沼海岸え来る道が別れていた。藤が谷には、名前は知らないが大きな奥二に門構えの別荘があった。駅には出札も改札

もない無人駅であったが鵜沼は無人駅ではなく交換所であるからホームも上屋もあった(図1)停留所の東側は通称「百両山」といつて太い松の林があった。その東側は片瀬川が流れていた。

西側は今と同じように急な短い坂になっていて北側に茶屋(山上)がありこの坂が砂山(松山)にぶつかるところは丁字路になっていて、北へ行くと、藤沢へ行く路になっていて、江ノ電の踏切を越えて、線路に沿って藤が谷を越えて川袋へ行った。川袋は堤防の上にあったわけだがこの駅から東に折れて、片瀬街道に通じた。

この堤防はいつできたかわからないが恐らく、大正六年の大暴風するとき片瀬川の切換えを行なったものと思える。この部分で片瀬川は

西に大きく曲がり込んでいたようで、このことは東京国立博物館

所蔵、東京美術発行の江嶋見取絵図にもよく見られる。(図2)

江ノ電の堤防の西側は深い田であった。

ここは斎藤地主の持地所であったが、

昭和二、三年頃、片瀬山からトロッコを

敷いて、江ノ電の線路をくぐって土を

運んで埋め立てた。この時小作争議

があったように聞いている。

江之嶋道見取図によれば大山道が

片瀬川の西部に入って来て、片瀬街

道に合している。この大山道と片瀬

川との曲部との接するところあたりから

江之島え早船が出たという伝えがある。

私はこの話を関根清治氏から聞いた。

大山道は、大山参りの行者の一行が帰りに江之嶋え詣でるならわしになつていたらしく、大山から直接に江ノ嶋えくるために出来た道で東海道からの入り口からの道しるべが、山田検校の道標として建てられていたのであつた。入り口は現在の神明五丁目で、湘南高校入口辺りのようである。東海道分間延絵図には字(あぎ)車田となり入口に鵜沼村と書いてある。鵜沼村はさらに南の方に本村があつたようで、萬福寺のあたりが中心らしくそのはづれに神明社がある。大山道は鵜沼村を通過して、片瀬街道に石上のところで合したものであらう。

江ノ電の鵜沼停留所の西側は坂になつていて、丁字路になつてゐることは前に書いたがこの丁字路のつきあたりは、松山でこの上に鵜沼海岸開拓をやつた伊東将行の鵜沼海岸開拓をたゝえた大きな碑がある。また赤城山から招請したとゆう賀来神社があつた。賀来神社は神主はいなかつた。そのため海岸地区に対して氏神としての力は弱かつたが、ここに伊東将行の称賛碑ができたのちの大正十年頃の正月

に盛大なお祝いをやったことを覚えてゐる。

このお祝のとき植文の若衆たちが、揃いの衣裳に、花笠をもつて八木節をあの下下の道路のところに並んで踊つたのを覚えてゐる。私が八木節を知つた初めである。

賀来神社の小さな神殿には何もかかれていないが、この境内を区切つた石の垣根の主柱には、明治十八年六月吉日で記され、献納者は木下利吉（東京神田通新石町）木下吉三郎（東京下谷池ノ端七軒町

となつて、これを作つた人は藤沢大阪町石工広田仲太郎となつてゐる。この境界石垣の立つた頃から鵜沼海岸の開拓が始まつたものである。しかし手洗いを見ると安永八年己亥八月（一七七九年）となつており、傍に祭られた善神王宝は発願平井兵衛門で

天明元年（一七八一年）辛丑八月となつてゐる。したがつてこれらは賀来神社をここに移すとき同時に移したものらしい。（つづく）

「
全
頁
画
像
」

会員の皆様にお願ひ。

本年は順調に、五、六、七、八号と充実した会誌を発行する事ができました。会員の方々の地道な努力と力作でまさに手作りの会誌です。過去と未来を結ぶものは何ものでもなく現在に生きている私達だと思ひます。その人間の生き方がそのまま厂史のつなぎの役目を果すのではないでしょうか。

どんな小さな石のかけらにも生命がある。松に吹く風にも詩の音がある。これらに息吹を与え、そしてその音色をき、わけるのが私達です。

どんな事でもい、発見したことや、感じたことは、書きとめていきましょう。来年もまた、九、十、十一、十二号と四号発行を予定しています。

どうか、たくさん原稿を寄せて下さい。高木和男氏の「大震災後からの鵠沼海岸」は連載とします。これに関する感想も書いて下さい。本年は本当に皆様方のご協力有難うございました。

(リーダー 伊藤 昌)

藤沢市鵜沼海岸二丁目一〇番三四号

藤沢市立鵜沼公民館内

鵜沼を語る会

電話 (36) 七四三一